（報告要約）江戸の滑稽作品に見られる漢学的要素

水上雅晴

明治初期に全国各地の小学校で使われた課業表を見ると、儒家経典などの漢籍が講読の対象に含まれることが珍しくなかったことに気づく。その状況は、欧米の教育制度を模範とした学制が明治五年八月に発布されるより前だけでなく、学制施行後にも看取される。「人民一般必ズ学バズンハアルベカラザルモノ」（学制第二十一章）と「国民皆学」が規定された初等教育の場において漢籍が教科書として使われることがあったのは、学童にとって理解可能な書物であるという共通認識があったからにほかならない。

かかる共通認識が成立するのは、江戸から明治に時代が変わる時期において漢学が広く行き渡っていたからであり、中国古典学の衰退が嘆かれる現在、当時における漢学享受の状況を振り返ることは、狂瀾を既倒に廻らすことにはつながらぬまでも、斯学の行方を考察するための手掛かりになるかも知れない。そうであれば、江戸時代末期の庶民レベルでの漢学受容の状況とその度合いを解明することにも意味があるのではないかと考えて、滑稽・パロディ文学の作品から漢学的要素を抽出し、考察を加えてみた。

報告者の学力不足はもとより、報告時間などにも制約があったので、取りあげる作品は、①洒落本・②落書・③川柳の三種に属するものにしぼった。これらを考察の対象に選んだのは、庶民にとって身近なジャンルであること、その上、庶民が自身の作品を発表するものも含まれていて、彼らと漢籍との関わりを実態的に把握するのに好都合だと考えられたからである。

①洒落本は職業作家によって書かれるものであり、仮名が多く使われるから、主要な読者として庶民が想定されていたに相違ない。漢学との関係から言うと、関亭京鶴『傾城情史 大客』（一八三二年刊）は注目すべき作品の一つであり、書名の「大客」が四書の一つである「大学」のもじりであることは、巻頭の記述を比べることで容易に了解される。『大客』が「酒酊子曰大客古之妓書而初客入通之門也」から始まるのに対して、朱熹『大学章句』が「子程子曰大学孔氏之遺書而初学入徳之門也」から始まっており、字配りのみならず、読み下しの読音のひびきまで似ているのである。

『大客』の全体はこのような調子で書かれているが、同書を『大学章句』のパロディと即断してはならない。書名前部の「傾城情史」は、江戸時代に庶民が漢籍を自学するための参考書シリーズである渓百年『経典余師』のもじりであり、そのことに想到すると『経典余師　大学』（一七八六年刊）の存在が浮かびあがってくる。『大客』内の仮名書きの夾注に着目すると、『経典余師　大学』の仮名書きの夾注をもじったものであることがすぐに判明し、後者の扉の文字

やレイアウトまでもが前者において模倣されているのを目のあたりにすると、パロディの徹底ぶりに圧倒される。

調査を進めると、『経典余師　大学』と『傾城情史　大客』との間には、山東京伝『京伝予誌　大楽・通用』（一七九〇年）・芝全交『大客臭句』（一七九〇年）・為永春水『大学笑句』（一八二九年以降）などのパロディ本が介在していたことが明らかとなり、朱熹『大学章句』、そして『経典余師』が庶民にとって身近な書物であったことが鮮烈なイメージをともなって理解された。

②落書は刊行されるものではなかったから、作品発表のためのハードルが低かったと思われるが、資料の性質上、作品が後世に伝わりづらく、落書作品の全体像を把握するのは困難である。現在、参照可能な江戸時代の落書は、矢島隆教編『江戸時代落書類聚』に集められているものに限られるといっても過言でない。落書は、庶民も作者になることがあったかに思われるが、同書所収の作品を調べると、漢文や擬漢文体のものが多数を占め、一般庶民が気軽に書けるものではなかったようである。現存する作品には儒家の経典と漢詩のパロディ作品が少なからず含まれていて、前者は『大学』、後者は『唐詩選』を下敷にしたものが多い。

③五七五の前句付をすれば一つの作品が完成する川柳は、洒落本や落書と異なり、庶民が参入しやすい文学ジャンルである。百六十七編まで刊行された『誹風柳多留』には、市井の人々によって詠まれた作品が多く収録されており、その日常生活が活写されている。管見によると、庶民と漢学との関係を示す川柳作品には以下の三種がある。(a)漢文の一節をもじったもの、(b)漢籍の記述を踏まえたもの、(c)日常生活を詠んだもの。

(a)と(b)に分類される作品については、典拠を逐一明らかにしていくことで、庶民レベルでどのような漢籍が読まれていたかを詳細に把握することが可能となる。さらに(c)に分類される「家持ちの次に並ぶが論語読み」(一・24)や「道春点を下げて来て誘い出し」(一七・31)の類の作品を拾いあげていくことで、庶民と漢学・漢籍との個人的・社会的な関係が浮き彫りになってくる。

以上、「貸本屋唐と日本を背負ってくる」(四八・30)の古川柳が示すように、漢学が隆盛を極めた江戸時代末期における庶民レベルでの漢学享受の実態を解明するために、滑稽・パロディ文学が有効な研究資料となり得ることを論じた。この種の文学と中国文学との関係については、国文学者による精緻な研究もなされているが、漢学実態を解明する資料として滑稽・パロディ文学を位置づける視点を導入したり、大会での報告の中で例示したように、統計的手法を導入したりすることで、日本漢学研究上の資料としての新たな意味づけを与えることは可能だと考えている。

本シンポジウムを企画し、筐底に眠っていたノートに光を当てる機会を与えてくださった高山大毅氏、コメンテーターとして今後の研究の進め方に関して貴重な提言をしてくださった長尾直茂氏、「次世代シンポジウム」の名称にふさわしい日本漢学研究の新たな可能性を切りひらく報告をして、「旧世代」の不足を補ってくださった韓淑婷氏と宋晗氏、そしてさまざまな形でシンポジウムに参加し、反応を示してくださった会員の皆様に謝意を表する。